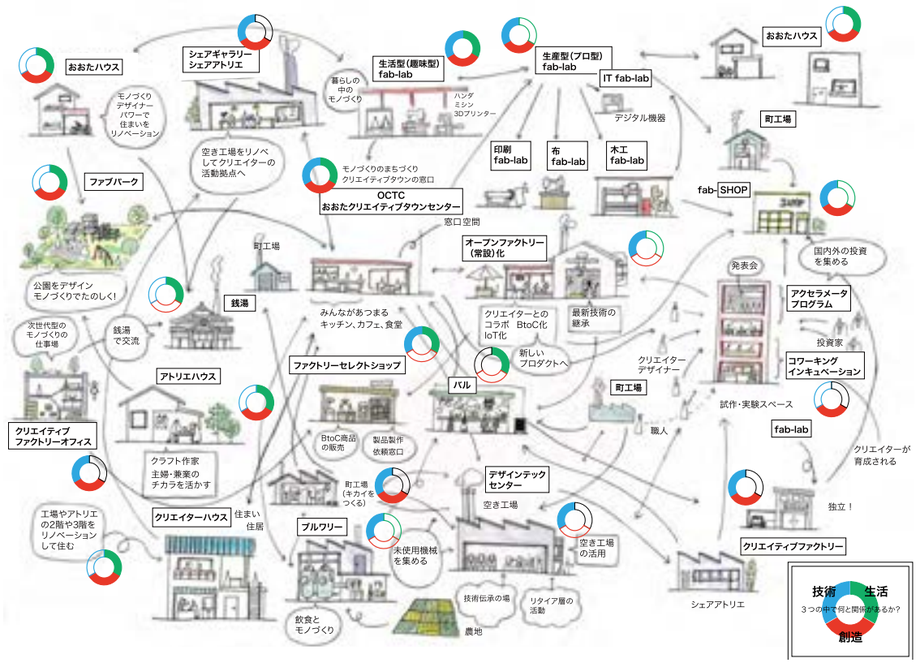
3

おおた「クリエイティブ・ファブタウン化」計画

おおたのクリエイティブ・ファブタウンの将来像の提案とシンポジウムの内容について紹介します。

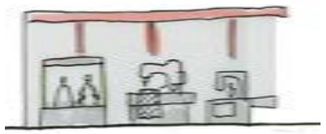
3-1 クリエイティブ・ファブ・エコシステム（モノ創りのまちの生態系）の構築



クリエイティブ・ファブ・エコシステムのイメージ図

今後、おおたがクリエイティブ・ファブタウンとして発展するためには、前述（1-3）の「4つのN」を意識しながら、これを適宜まちなかに挿入してゆく必要がある。まちの中で多様な創造性が生まれるようになるためには、「多様性」と「寛容性」の存在が重要であり、そうして生まれた様々な創造性、あるいは、様々な「技術」×「創造」×「生活」の組み合わせがまちじゅうのいたるところに挿入され、これらが様々な人をつなぐ「場」を形成し、多様なシナプス・ネットワークがつながってゆくことが、強くしなやかな（レジリエント）で持続可能な「地域構造」を創りだすことにつながってゆくと考えられる。そのために、「創造」×「技術」、「技術」×「生活」、「生活」×「創造」といった化学反応が生まれてゆくような様々なプログラムを挿入することで、多様なつながりが生まれ、結集として豊かな創造的なまちの生態系（クリエイティブ・ファブ・エコシステム）が育まれる。

各拠点の説明



生活型（趣味型）ファブラボと生産型（プロ型）ファブラボ

ファブパーク

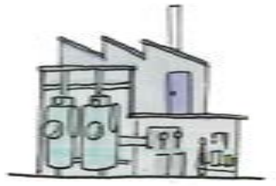
生活型（趣味型）ファブラボと生産型（プロ型）ファブラボ

モノづくりが生活の中に入り込み、プロでなくても（あるいは機器をもたなくとも）製品の製作ができてしまうようなモノづくりセンター。3Dプリンターやスキャナ、レーザーカッターやCNCルータ、ショップボットなどの機器、あるいは、ミシンや印刷機器、などが設置され、デジタルデータを持ち込むことで製品開発が可能となる。一般の趣味などの中で使用する生活型と、個人のプロが用いる生産型が考えられる。

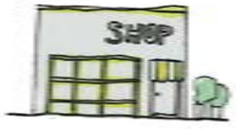
ファブパーク

こうしたクリエイティブ・ファブなまちでは、公園の遊具や公園空間もデザイナー・クリエイターとのコラボレーションで設置される。

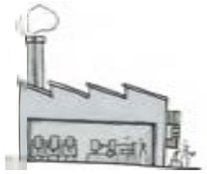
環境を整えた町工場とそのオープンファクトリー化



ブルワリーなど食とモノづくりのつながり



ファブセレクトショップ



デザインテックセンター

おおたハウス / リノベーション型デザインシェアハウス

アトリエハウス

インキュベーション施設

環境を整えた町工場とそのオープンファクトリー化（クリエイティブファブファクトリー）

今後、町工場の環境自身も変わっていかないといけない。女性や様々な担い手が関わる工場となるためにも、製造現場、福利厚生、食堂や様々な環境を整え、執務環境の高質化も必要になる。また、BtoCに向けて、常設的なオープンファクトリー（見学ルート、ギャラリーやショップも併設）化も目指す。

ブルワリーなど食とモノづくりのつながり

いわゆる製造業だけでなく、例えば飲食に関わる産業などは、技術と生活をつなぐヒントとなる。地元の材料で地元のクラフトビールを製作している「羽田ブルワリー」と店舗「羽田バル」のように、農地ー工場ー販売や店舗などが連携して、豊かなブランドで食のモノづくりが進む。そこにデザイナーも加わり、また、機械や器具の製作は工場で行うことで様々なネットワークができる。

ファブセレクトショップ

これまで大田の町工場は、BtoB中心であったが、地域で付加価値をつけ、価値ある「製品」を生みだすため、地域の工場内で製作した製品を販売するためのファブ・セレクトショップを設置する。

デザインテックセンター

町工場の技術を次世代に継承するため、そして、職人をリタイアした人達の活躍の場として、各工場で使用していない機械なども集めて、継承の場を創出する。

おおたハウス / リノベーション型デザインシェアハウス

大田区内の町工場や既存のストックなどをリノベーションして、独自の魅力ある住居を供給する。町工場の上階の空き部屋（かつての従業員寮など）をリノベーションして、クリエイター等のシェアハウスとすることも考えられる。

アトリエハウス

クラフト作家の力を活かす：住宅を中心とした生活市街地には、主婦であったり仕事をしながら副業的にクラフト作家やデザイナー活動をしている人も隠れて存在しており、こうした人たちの力を発揮できるような場づくりを行う。

インキュベーション施設（試作実験スペース・コワーキング＋シェアオフィス＋アクセラレータープログラム）

クリエイターやデザイナーがまちの中で活動するための拠点を設置する。共有可能な機器や場のあるインキュベーション施設（試作実験スペース）から、コワーキングスペース・シェアアトリエ（オフィス・ギャラリー）などとそれぞれが多様に供給されつつ、ホール空間では定期的にアクセラレータプログラムや様々な共有交流の場を設ける。

3-2 「つながる」「ひろがる」モノづくりのまち新田丸
ー学生による「おおたクリエイティブ・ファブタウン化」計画ー

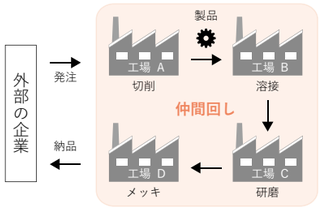
新田丸エリアの将来像イメージ

提案の背景

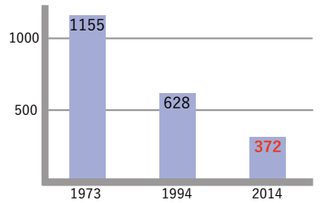
本提案は、横浜国立大学地域課題実習（＊）の１つである、おおたクリエイティブタウン研究プロジェクトのメンバーによるものである。本プロジェクトでは新田丸エリア（東急多摩川線武蔵新田駅･下丸子駅周辺エリア）をフィールドに、町工場と連携したまちづくり活動を展開してきた。活動が５年目を迎えるにあたり、プロジェクトでの活動から得たことや、大学で学んだことを活かし、新田丸エリアのあるべき将来像について提案を行った。

新田丸エリアには、戦前期から高い技術を持つ町工場が集積している。しかし、近年では後継者不足や住宅需要の高さが重なり、工場の数は緩やかに減少し続けている。一方、住民にとって身近な場所でものづくりが行われている環境は地域固有の資源と捉えることもでき、魅力的なまちとなるためのヒントが隠されているはずである。中でも､町工場には古くから「仲間回し」と呼ばれるものづくりのネットワークが存在し､これを活用したいと考えた。

（＊）横浜国立大学地域課題実習
横浜国立大学が実施している副専攻プログラムの授業であり、実際に地域に出て、様々な方と連携しながら地域課題を解決していく実践的活動の実習。



仲間回しネットワークの仕組み



下丸子・矢口地区の工場数変遷

モノづくりのまちにおける「つながる」「ひろがる」とは

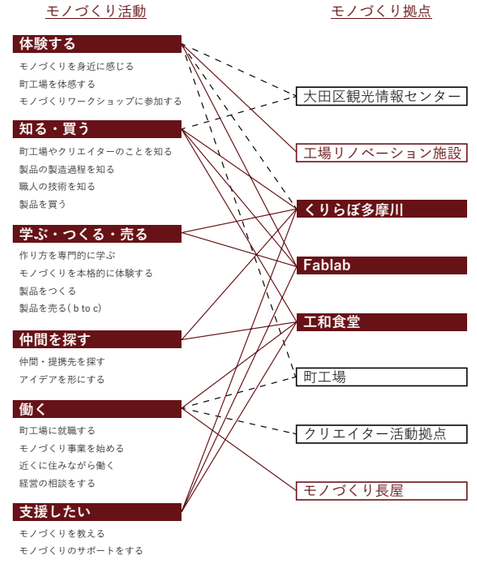
町工場の仲間回しネットワークを強化しつつ、地域住民や外部のクリエイターを巻き込むことにより、職人による「ものづくり」のまち新田丸から、より多くの人が幅広いモノづくりに関わる「モノづくり」のまち新田丸へと進化をすることが必要であると考えた。様々な主体間のネットワークを「つなげ」､モノづくりの裾野や種類を「ひろげる」という２つの言葉をキーワードにして提案する。その実現には拠点の整備が効果的であると考え、これを提案の中心とした。

「つながる」

現在ある工場ネットワークを維持し強化すると共に、町工場とクリエイター・デザイナーとのコラボや住民のモノづくりへの参加など、これまでになかった出会いのきっかけを作ることで、新田丸の新たなネットワークをつくる。

「ひろがる」

これまでの町工場職人という限られた人のみによる「ものづくり」から、様々な分野の技術・アイデアを取り込むことで、裾野が広くクリエイティブな「モノづくり」へ。住民やクリエイターも巻き込み、新田丸は、「モノづくり」と暮らしが調和するまちへ姿を変えていく。



新田丸でのモノづくり活動とその拠点

モノづくりとくらしを近づける
くりらぼ多摩川

くりらぼ多摩川

「食」を通じた交流拠点
工和食堂

工和食堂

くりらぼ多摩川

モノづくりが日常の経験・景色の一部になるような、クリエイティブ拠点を提案する。併設したアトリエ付住居に住むクリエイターの活動が垣間見えるカフェや広場、ふらっと立ち寄ってモノづくり体験に参加できる場などを通して、地域住民にとってモノづくりがより身近に感じられるようになる。

工和食堂

工和会協同組合の拠点である工和会館をケーススタディとして食堂を提案する。お昼は食堂・夜は BRA として工場の職人・地域の住民が集まる拠点。工和会事務局としても使われる他、ミーティングスペースや町工場の情報展示、製品の展示・販売スペースがおかれ、誰もが訪れられるオープンな場に変わる。

「モノづくりのまち新田丸」での生活

本提案により実現したい新田丸エリアの将来像を、具体的な４人のプレイヤー（元金属加工職人、裁縫好き主婦、アクセサリー作家、若手町工場職人）に代表させて示す。新田丸エリアのあるべき姿として提案するまちに住む人のことを「モノまち住民」と呼ぶことにし、彼らの１日の動線や活動内容を地図上に示すことで、エリア内の各拠点でどのようなことが起きているかということを視覚的に理解できるようにしている。

モノまち住民の１日

モノまち住民の１日

モノまち住民の１日

地図上に登場する「Fablab」とはモノづくりをする専門的な機械が用意され、一般の人が利用できる場のことである。本提案では、金属加工、木工、樹脂加工、印刷、布加工、3D モデリングのそれぞれに特化した Fablab をエリア内に分散配置することを提案する。各 Fablab はそれぞれの加工を専門とする工場の近くに配置されており、技術指導などを受けることができる仕組みとなっている。

ここで代表例として扱った４人について詳しく説明する。地域の工場で働いていた経歴があり、工和会とも関係を持つ「元・金属加工職人」は、「Fablab_metal」で金属加工機械の操縦などに関するアドバイザーや工和会の技術講習会の講師など、熟練した技術を人に伝える役割を果たす。「裁縫好き主婦」は、子どもが学校に通い始めたことでできた空き時間を活用して、友人とレンタルスペースで活動したり、「Fablab_nuno」で本格的な加工を行うなど、趣味に没頭する。製作活動の場として外部から大田区へやってきた「アクセサリー作家」は「ものづくり長屋」に居住し、その環境を生かして自宅下のアトリエで仕事をしたり、隣に住む職人と互いの得意分野で協力するなどして活動を行う。現役の職人である「若手町工場職人」は、モノづくりに興味を持つ人に町工場への就職に関する支援を行うとともに、自身の将来を見据え、「工和食堂」でさまざまな人と関わり合いながら、起業について学んでいく。

くりらぼ多摩川 - モノづくりと暮らしを近づける -

くりらぼ多摩川　外観パース

モノづくりをまちに開く

町工場と住民の間に音や臭いをめぐる軋轢があることを考えると、「モノづくりのまち大田」を実現するためには近隣住民の理解が必要不可欠であり、モノづくりを身近に感じ、参加してもらうことが重要である。

工場は常にシャッターを閉じて操業しており、職人が働く姿も高い技術も道ゆく人はみることができない現状がある。そこで、「モノづくりをまちに開く」をテーマとして、近隣住民にとってくりらぼ多摩川での活動が日々の生活の一部になるような建て替え計画を提案する。建築は、事務所や水回り、倉庫などをコアとして壁で囲み、その間を土間やデッキでつなぐことで、広場を囲むように建てる。可動式のガラス扉で囲った、土間やデッキ部分は半屋外的に使われ、通りがけにモノづくりをする人々の様子が見られるようにする。

カフェや広場を併設することで誰でも日常的にくりらぼを利用することができる。また、モノづくり体験や窓口といったコンテンツにより、簡単なものから本格的なものまで段階的にモノづくりに関わることができる。

模型写真 (1)
商店街側から広場方向を見る

模型写真 (2)
広場とモノづくり長屋部分

配置図 (S=1:1000)

「つながる」「ひろがる」

くりらぼ多摩川における提案を、提案全体のテーマである「つながる」「ひろがる」を軸に説明する。

「つながる」

モノづくりに参加する、専門が異なるクリエイターが出会う、モノづくりで生活をする、空き物件を活用する、きっかけを提供する。

「ひろがる」

くりらぼ多摩川で繋がったものから、より本格的にモノづくりをする、新しい製品が生まれる、職人やクリエイターが増える、町工場やアトリエが増える、というようにひろがり、「モノづくりのまち大田」の実現に結び付く。

モノづくり長家部分断面ダイアグラム

段階的なモノづくりへの参加を促す

①不動産情報

主に空き工場や工場の２階の物件を紹介する。コンバージョン案も提案し空き工場の活用へ繋げる。

② cafe

近隣住民の憩いの場を提供する。気軽にくりらぼ多摩川を利用してもらうきっかけとなる。

③モノづくり体験

手ぶらで簡単なモノづくりを体験できるワークショップを開催する。

④モノづくり窓口

もっと本格的で自発的なモノづくりを始めたい人のための窓口。FabLabへ案内、モノづくり長屋の紹介をする。

⑤広場

カフェの客、作業するモノづくり長屋の住民、遊ぶ近所の子供が共存する。

⑥モノづくり長屋

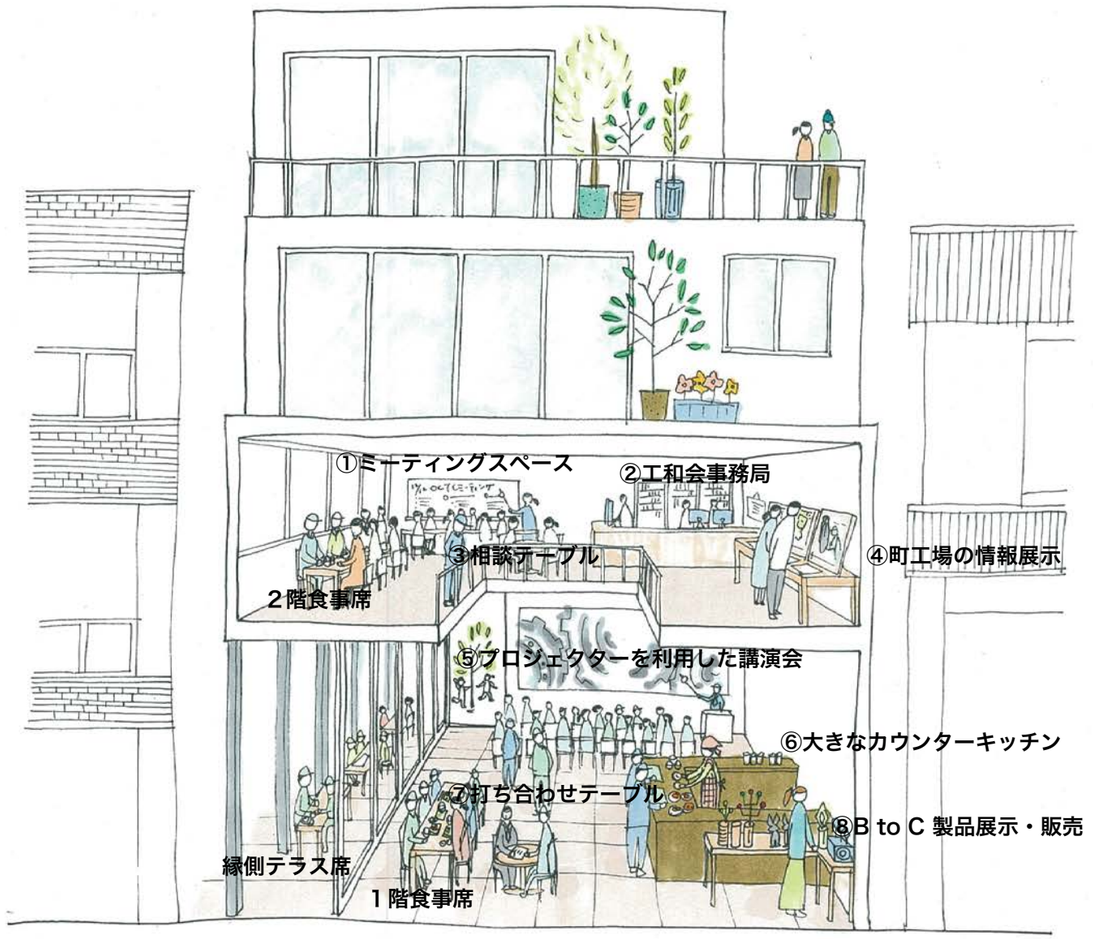
クリエイターの制作場所と住まいが隣接する『モノづくり × くらし』を具現化する。

作業スペース部分が開かれることで、道ゆく人も実際にものが作られる現場を見ることができる。

専門が異なるクリエイター同士の関わりから新しいものが生まれること、モノづくりで食べていくことへのハードルが低くなることを期待する。

事業が安定してきたら、自分のアトリエを持つよう、空き工場などに誘致する。工業だけではない、広義的なモノづくりが生まれていく地域になることに繋がる。

工和食堂–食を通じた交流拠点の提案–



工和食堂　断面パース

なぜ今、工場の協働が必要なのか

新田丸エリア（武蔵新田駅・下丸子駅周辺）の工場が多く所属し、工場協働の鍵を握る工和会協同組合の拠点、工和会館。今回、この場所を１つのケーススタディとして、モノづくりのまちにおける工場協働拠点のあり方を、「つながる」「ひろがる」を軸に提案する。

かつては、部材の加工に仲間回しが不可欠であったために、工場の協働は必須であった。しかし、仲間回しが行われることが少なくなった現在、そして今後、工場の協働は必要なのだろうか。本提案では工場の協働は今後も必要であると捉えた。まず、深刻化している工場の後継者不足問題や、廃業により技術が継承されない問題の改善には工場間のネットワークが有効である。工場間ネットワークが強固であれば、勤務先の工場での仕事が合わない場合や、万が一その工場が経営不振に陥ってしまった場合に、他工場を転職先として斡旋できる。これにより、工場へ就職することのハードルを下げることが、後継者不足問題改善への一手となる。また、個々の町工場で行うのが難しい技術や情報の発信を、複数の工場で協働して行うことで、「モノづくりのまち大田」全体としてのブランド力向上が期待できる。さらに、依然として工場による環境汚染を心配する人が存在するため、地域住民の意見を受け付け、理解を得るための窓口としても組合が必要である。

そこで、工場活性化の戦略本部であると同時に、他工場の職人どうしや職人と地域住民の交流拠点として、工和食堂を提案する。提案にあたり、人々御ゆるやかにつなぐしかけとして「食」に注目する。工和食堂は、昼間は食堂、夜間は BAR として、工場の職人が主役でありながらも、外部に対して広く開かれる。

「つながる」「ひろがる」

工和食堂における提案を、提案全体のテーマである「つながる」「ひろがる」を軸に説明する。

「つながる」

工和食堂は既存の工場ネットワークを維持・向上し、工場を活性化させるための戦略本部となる。さらに、これまでになかった、工場の職人とクリエイター、地域住民とのつながりを生むしかけとして食を通じた交流拠点を提供する。

「ひろがる」

町工場の技術と様々な分野の技術・アイデアが出会う機会や、地域住民が町工場の技術について知る機会を生むしかけを工和食堂に設ける。さらに、町工場の技術や魅力を外部に対して発信することで、よりクリエイティブなモノづくりを推し進める。

「食」を通じた交流拠点

模型写真 (1)　工和食堂２階から１階を見る

模型写真 (2)　工和食堂１階縁側テラス席

模型写真 (3)　工和食堂１階トークショー会場

模型写真 (4) 前面道路から工和食堂内部を見る

①ミーティングスペース

工和会やまちづくり組織などの会議に使う場所。食事スペースに近接しているため、ミーティングの様子が食事に訪れた人の視界に自然と入り、そのことが町工場の取り組みやまちづくり活動に興味をもつきっかけとなる。

②工和会事務局

新田丸エリアの工場の情報を一元的に管理し、工場活性化の戦略本部となる事務局。製品加工に関する相談を一手に引き受け、各加工が得意な工場を斡旋することで、「ものづくりで困った時はとりあえず新田丸エリアへ」というエリア全体としてのブランド力を向上させる。また、現役を引退した職人を技術指導者として工場に派遣する業務を行い、技術伝承に貢献する。

③相談テーブル

町工場で働く人の仕事環境や人間関係に関するお悩み相談や、町工場への就職を考えている人の就職相談を受ける場所。食事席の一部で気軽に相談することができる。

④情報展示コーナー

町工場の技術や工場で働く魅力について紹介する展示コーナー。工場への就職を考えている人はもちろん、食堂を訪れた人が見てみたいと感じるような内容の展示を行う。

⑤トークショー会場

工場向けのセミナーからクリエイターのトークショーまで、幅広いテーマの講演会を開催する。ファサードがガラス張りであるため通りから講演会の様子が見えやすく、地域住民などが通りがかりので飛び入り参加するということが期待できる。

⑥カウンターキッチン

ランチタイムは定食をつくるキッチンとして、夜間の BAR 営業中や講演会開催時はドリンクの提供カウンターとして使われる。建物の主役として大きなキッチンを設けることで、初めて訪れた人が「自分もお客さんとして入っていいのだ」と感じることができ、足を踏み入れやすくなる。

⑦打ち合わせテーブル

工場と他工場、他企業、クリエイターなどとの打ち合わせに使う。各工場に比べ工和食堂は駅から近く、外部から見て場所がわかりやすいため待ち合わせ場所に使いやすい。また、食事をしたり飲み物を飲みながら気軽な雰囲気で打ち合わせができる。

⑧ BtoC 製品展示コーナー

通常は BtoB 製品を中心に製作している工場が新たに開発した BtoC 製品を展示・販売する。BtoC 製品は BtoB 製品に比べ、一般に興味を持ってもらいやすいため、これを展示することが町工場について知ってもらうきっかけとなる。また、Fab-lab を利用したついでに食堂を訪れたクリエイターに、工場とコラボレーションする他、可能性について考えてもらえる他、「あの工場の人が開発しているなら、自分も BtoC 製品を開発してみよう」と職人の BtoC 製品開発への動機付けにつながる。

3-3　クリエイティブ・ファブタウンミーティング

クリエイティブ・ファブタウン ミーティング
つくる・いとなむ・くらす都市の創造に向けて

縮減時代を迎えた日本の諸都市では、都市の活力低下、産業構造の転換、少子高齢化など、従来の都市づくりでは解決できない問題が顕在化していますが、近年、「創造都市（クリエイティブシティ）」と呼ばれる都市づくりの方法論が広がりをみせており、産業・雇用・職・経済とまちづくりとの新たな関係が模索されています。

一方、日本では、精緻な技術と丁寧な仕事による「モノづくり」ブランドが従来の産業社会を支えてきたものの、まちの「暮らし」との関わりが薄くなっており、その継続性に課題を抱えています。

そこで、今回は、「モノづくりとまちづくり」の関係性に着目して、新たな創造的都市づくりと融合した「つくり、いとなみ、くらせる」複合市街地（クリエイティブ・ファブタウン）のあり方について、みなさんと一緒に考えてみたいと思っています。

【日時】2018 年 12 月 15 日（土）
13:00～16:30 (12:30 開場)
【場所】首都大学東京 秋葉原 サテライト キャンパス
(秋葉原ダイビル 12 階)
〒101-0021 東京都千代田区外神田 1-18-13 秋葉原ダイビル 12 階
【申込】事前申込制（定員 50 名）・無料

タイムテーブル

12:30　開場
13:00　開会挨拶　野原 卓（横浜国立大学 准教授 , OCTC センター長）
13:10　オープニングプレゼンテーション「おおたクリエイティブタウン構想」
13:30　パネリスト報告
　【野嶋 慎二／今村 ひろゆき／連 勇太朗／山田 立】
14:50　休憩（10 分）
15:00　ラウンドテーブルミーティング
　パネリスト＋コメンテータ【泉 英明／窪田 亜矢】
　コーディネータ【野原 卓】
16:15　まとめ　岡村 祐（首都大学東京准教授 ,OCTC 副センター長）
16:30　終了予定

【登壇者プロフィール】

野嶋 慎二
福井大学工学部建築・都市環境工学科教授。博士（工学）。一級建築士。東京大学工学部建築学科卒、早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了、同博士課程修了。専門は、都市計画であり、街の自律性に依拠した都市再生の方法に関する研究及びまちづくりの実践活動、建築デザインも行う。2017 年度日本建築学会賞（論文）受賞。

今村 ひろゆき
まちづくり会社ドラマチック　代表社員。クリエイター向けアトリエ・オフィス・ショップの開発・不動産再生を行い、拠点の立地する町の資産に注目したイベントやプロジェクトを展開。一連の活動を通じ、町にユニークな人材や活動が根づく土壌をつくる。主なプロジェクトに現代の公民館 SOOO dramatic !、茅とモノづくりの祭典 浅草エーラウンドなど。

連 勇太朗
NPO 法人モクチン企画代表理事、株式会社@カマタ代表取締役
建築家。2012 年 NPO 法人モクチン企画設立、2018 年株式会社@カマタ設立、共同で代表取締役就任。他に慶應義塾大学、横浜国立大学、法政大学などで非常勤講師を務める。主な著書に「モクチンメソッド―都市を変える木質アパート改修戦略」（学芸出版社）。

山田　立
玉川堂・番頭。「燕三条 工場の祭典」実行委員長。１９７３年生まれ。百貨店勤務を経て、金属加工の街・燕三条で創業２００年を超える玉川堂にて営業・企画全般を担当し、鎚起銅器の技術の伝承にカを注ぐ。自社のみならず、燕三条地域全体の産地の発展に尽力している。

泉　英明
都市プランナー、有限会社ハートビートプラン代表。高松、下関、大阪なんば、豊田、岡崎のまちなか再生や公共空間のプレイスメイキング、東大阪市高井田の工業地域の住工共生まちづくり、水辺空間のリノベーション「北浜テラス」や「水都大阪」事業推進、「長門湯本温泉」の温泉街再生などに関わる。まちづくりの「まち医者」としての関わりを目指す。

窪田 亜矢
1968 年東京生まれ。東京大学都市工学科卒業、株式会社アルテップ、工学院大学などを経て、2014 年より、現職（東京大学大学院工学系研究科・都市工学専攻、地域デザイン研究室・復興デザイン研究体）。最新刊に「津波被災集落の復興検証 - プランナーが振り返る大槌町赤浜の復興」（萌文社）。

野原　卓
横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院准教授、一般社団法人おおたクリエイティブタウンセンター代表理事（センター長）。（株）久米設計、東京大学助手・助教等を経て現職。大田区、喜多方市、横浜市、石巻市などで都市デザイン実践研究に従事。主な著書に「まちをひらく技術」（学芸出版社）「アーバンデザイン講座」（彰国社）など。

岡村　祐
東京大学大学院博士課程修了、博士（工学）。現在、首都大学東京都市環境学部観光科学科准教授。一般社団法人おおたクリエイティブタウンセンター副センター長。共著書に、全国のオープンファクトリーをはじめ、地域資源一斉公開手法（オープンシティ・プログラム）をまとめた「まちをひらく技術」（学芸出版社 ,2017 年）など。

主催：横浜国立大学 都市計画研究室／首都大学東京 観光科学域／一般社団法人 おおたクリエイティブタウンセンター（OCTC）
問い合わせ先：info@oct-c.com 【一般社団法人おおたクリエイティブタウンセンター】

クリエイティブ・ファブタウン　ミーティングのチラシ

クリエイティブ・ファブタウン ミーティング

つくる・いとなむ・くらす都市の創造に向けて

これまで進めてきた大田クリエイティブタウンの活動の総決算、そして、この活動を内外のプレイヤーやクリエイター、専門家も含めて議論するために、シンポジウム「クリエイティブ・ファブタウンミーティング つくる・いとなむ・くらす都市の創造に向けて」(日時:2018年12月15日(土)、場所：首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス）が開催された。モノづくりとまちづくりの関係について幅広い議論を行うために、パネリストとして、野嶋慎二氏（福井大学）、今村ひろゆき氏（まちづくり会社ドラマチック）、連勇太朗氏（@カマタ）、山田立氏（「燕三条 工場の祭典」実行委員長）、コメンテータとして、全国各地で民間とともにまちづくり実践をしつつ、東大阪市ではモノづくりにも関わる泉英明氏（ハートビートプラン）、被災市街地での産業再生を検討されている窪田亜矢氏（東京大学）をお迎えし、コーディネータ（野原・岡村）とともにディスカッションを行った。多様なプロジェクト実践を行う各ゲストとの議論を通して、モノづくりへの想いやモノづくりベースからまちづくりベース、ビジネスベースなどの多様な関わり方、生活の巻き込み方など、様々な視点からの可能性と示唆を得ることができた。

オープニングプレゼンテーションの様子

オープニングプレゼンテーション

「おおた・クリエイティブタウン論」

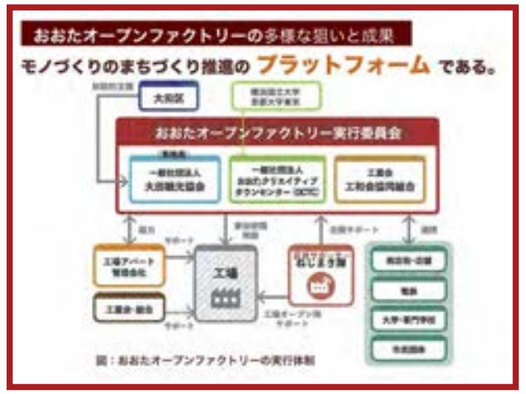
シンポジウムの冒頭では、横浜国立大学大学院准教授野原卓氏（一般社団法人 おおたクリエイティブタウンセンターセンター長）より、これまでの近代都市計画のあり方、および、都市と産業の関係性に関する課題認識と、「なぜ今、クリエイティブ・ファブタウンか」という問題設定、そして、大田区で行われてきた「大田クリエイティブタウン構想」と「モノづくりのまちづくり」の取組みについての紹介を含んだオープンニングプレゼンテーションが行われた。

モノとまちの関係を再構築する

近代の都市計画は生活と産業を切り離して考えられてきた。一方、地方都市や産業都市において産業構造が変貌し、雇用不足により居住者の生業が失われつつある現代においては、モノとまちの関係を再構築し、都市計画を複合化することが必要であるといえる。近年、メイカームーブメントや DIY 精神など、モノづくりと暮らしがつながるヒントが生まれてきた。その流行のなかで、ようやく今まで離れていた生活と産業を一緒に考えていく「クリエイティブ･ファブタウン」を考えられるステージにたどり着いたのではないか。

創造 × 生活 × 技術のまちづくり

大田クリエイティブ･ファブタウンの実現へ向けて、「創造」「生活」「技術」の３つの視点が重要である。「生活」は、今でも人口増加が著しい大田区の住民そのものであり、「技術」とは、今まで受け継がれてきたモノづくりの力である。そしてそれらをうまく受け繋いでいくための新しい工夫や知恵、外からのパワーが「創造」である。技術や生活にクリエティビティのある活動をつなげていくことで、単なるベットタウン的な住宅地ではなく、新しい価値を生むまちを創られてゆくと考えられる。



図：おおたオープンファクトリーの実行体制

おおたオープンファクトリー

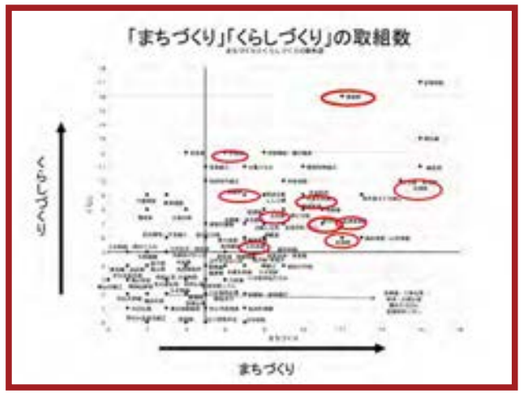
オープンファクトリーとは、町工場を期間限定で無料で一斉公開する取り組みである。おおたでは８回にわたり、仲間回しの体験やカプセルトイの作成と販売、商店街を合わせたまち全体を楽しんでもらえるようなプログラムなどに取り組んできた。また、今年度は今までの活動に加えて、町工場の担い手不足へのお手伝いとしてシュウカツプロジェクトに取り組んだ。様々な人たちがオープンファクトリーを介してモノづくりのまちに近づいてきており、この活動がまちづくりのプラットフォームになっていると実感している。

ゲストプレゼンテーション１

野嶋慎二氏（福井大学工学部建築・都市環境工学科 教授）

「伝統工芸産地のまちづくり」

福井でのまちづくりの研究をベースに、まちづくりの実践や建築デザインを実践する野嶋氏から、15, 6 年前に行った全国の伝統工芸産地におけるまちの自律性に関する研究の報告、そして、各地のモノづくりの現場におけるまちづくづくりの事例を踏まえ、クリエイティブ･ファブタウンの実現に必要な地域としての総合力についての説明がなされた。



伝統工芸産地のまちの自律性

まちの自律性について研究、中でも古くからの伝統工芸を生業とした工業生活文化が形成されている伝統工芸産地に着目し、地域資源を継承しつつ活力を持続させるまちづくりが行われていることが紹介された。全国の伝統工芸産地において、モノづくりとまちづくり､暮らしづくりが一体的に行われた例を調査すると、中心市街地のまちづくりや伝統工芸産地の風景づくりをはじめ、体験や見学を主体とした観光や居住支援、伝統工芸を活かした教育など、モノづくりと合わせて幅広い活動が行われていることが示された。

常滑市のまちづくり

古くから窯業が盛んな愛知県常滑市では、レンガ造りの煙突と黒い下見板貼が特徴的な景観を作り出している。しかし、工場の郊外化により空き工場が増加したため、やきもの散歩道の整備によるまちづくりが行われた。やきもの散歩道では、下見板貼の空き工場の活用や塀や基礎への陶器の埋め込みによる景観づくりが進められ､15 年ほど前であるものの現在のリノベーションの流行りに先駆けた動きがあった。また、やきもの散歩道に関連する組織や空間整備や創造活動が行われ、互いに連動していることが明らかになった。

地域としての総合力の大切さ

多くの伝統工芸産地において、個の発意による旧工場の活用やリノベーションなどと、問屋制の衰退による新しいネットワークの構築が、景観協定やイベントに代表されるまちづくり事業につながっている。さらにそれらが互いに連動することでまちが自律的に変容していくと考えられる。伝統工芸産地はもともと生産の場となり、顧客のニーズを把握し発信していく場になったのだ。モノづくりとまちづくり、暮らしづくりを組み合わせた地域としての総合力によって、クリエイティブ・ファブタウン化する可能性が提起された。

ゲストプレゼンテーション２

今村ひろゆき氏（まちづくり会社ドラマチック 代表社員）

「まちを元気にするための仕組みづくり」

まちづくり会社の代表として、まちを元気にする取り組みをしているほか、オープンファクトリーの１つである浅草 A-ROUND の運営に携わっている今村氏からは、元気なまちの共通点はなにかということや、やりたいことを事業として続けていく際の課題とそれに対して自らが取り組んでいる支援策について､事例紹介を交えたプレゼンが行われた。

元気なまちとはどんなまちか

元気なまちの共通点は、ユニークな人が集まり、まちに活気が生まれるサイクルが存在することである。店やイベントに人が集まり、その魅力が SNS などで発信される。それによりさらに多くの人がまちを訪れ、「このまちに拠点を構えて新しいことを始めたい」という人が現れ、そして店やイベントの数が増え、そこに人が集まり活気が生まれて…と、元気なまちではこのような好循環が起きている。好循環を起こすための仕組みをまちに備えることが、まちを元気にするために効果的であることが説明された。

“ 死の谷 ” を乗り越えるための支援

自分で何かを始めたいという情熱にあふれるプレ創業期・創業期から、事業の採算を合わせて継続していく段階に進むことは困難であり、この " 死の谷 " で挫折する事業が多い。事業を支援するには、ハード面とソフト面の両面から段階に応じた方策を講じる必要がある。具体的に、ハード面の支援策には、やりたいことを実現する場としてのイベントスペースやシェアアトリエを整備すること、ソフト面の支援策にはイベントや講座の開催を通じた創業支援や創業希望者のネットワークづくりなどが挙げられる。

全員で運営するシェアアトリエ

家賃の高さが都心から人が活動できる場所を減らしている。そこで、空きビルに最低限の投資のみをし、安い家賃で利用できるというシェアアトリエをプロデュースが行われた。「インストールの途中だビル」というアトリエ名には、ハード面を綺麗にするのではなく、ソフトをインストールして場所を変えていくという意味が込められている。ここの特徴は入居者全員で運営をしていることで、話し合いによって少しずつ環境を変えている他、年に２回、アトリエ全体を外部に開くイベントを開催していることが報告された。

ゲストプレゼンテーション３

連勇太朗氏（NPO 法人モクチン企画代表理事　株式会社@カマタ 代表取締役）

「アップデートし続ける@カマタの活動」

@カマタは、入居者であるクリエイター同士のコミュニティであると同時に、大田区固有の面白いモノづくりをするためのリソース（空間や機材）をつなぎ、様々な人が使えるようにしていくプラットホームである。現存の３つの拠点と、４月にオープンする新たなモノづくり拠点の運営をベースに、街と工場の連携を促すプロジェクトが進められている。

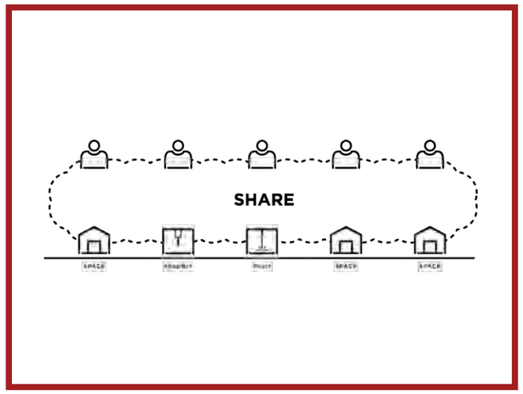
３つの拠点（カマタ__クーチ、カマタ__ブリッヂ、カマタ__ソーコ）

クーチは密集市街地の土地をつなげて生まれた空地で、いろんな人が使える場になっている。ブリッヂではマンションの空室率を解決するために、１階部分をシェアオフィスにし、街に開かれた使い方をしている。併設された工房にはショップボットなど加工機械が揃っており、自由にモノづくりができる。ソーコは元倉庫をギャラリーとして利用し、様々な展示を行っている。@カマタでは、拠点を作ることで、どうしたら街全体を面白いものづくりやクリエイティブな環境にできるかを考えていることが説明された。

川瀬一絵（ゆかい）

町工場とのコラボレーション

蒲田エリアの特徴である町工場が集積している地域特性を生かして、展示やイベント、プロダクト製作など様々な面での町工場とのコラボレーションを意識的に行っている。例えば、骨伝導のプロダクトを作っているスタートアップ企業と@カマタや、アーティストと溶接屋さんなどのコラボ展示をソーコで開催している。また、@カマタの建築家と町工場で新しい商業施設の壁面のプロダクトを製作した例もある。また、ポールダンサーのイベント設備を近所の町工場が手伝ったりとフランクなコラボが生まれてきている。



４つ目の新たな拠点

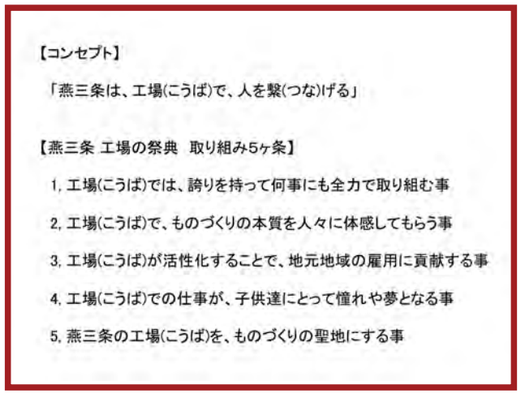
４つ目の拠点として、来年４月オープンの予定のモノづくり拠点を京急高架下に建設中。@カマタとしては、都認定のインキュベーション施設を運営したり、顧客とデザイナー、生産者が一対一の関係でカスタマイズ家具を作れる新しいサービスの拠点として利用することを想定している。現在ラウンドテーブルというイベントを行い、蒲田の面白い場所を転々としながら、町工場の人と大田のまちづくりに関わる人たちでものづくりやコラボレーションの方向性や、この場所の使い方について議論していることが報告された。

ゲストプレゼンテーション４

山田立氏（玉川堂 番頭　「燕三条 工場の祭典」実行委員長）

「燕・三条の名を全国区にした " 工場の祭典 "」

山田氏からは、自身が営業を務める由緒ある急須メーカーである玉川堂において、古くから工場見学が行われていたこと、その際の手応えをベースに、既存イベントであった「後継者育成塾」と「越後三条鍛冶まつり」を発展・改称させて「工場の祭典」を始めたこと、そして、年々進化する工場の祭典の様子や運営の舞台裏、これからの展望を語って



「燕三条 工場の祭典」の概要

「燕三条 工場の祭典」は、廃校をインキュベーション施設にした「三条ものづくり学校」と JR 燕三条駅、燕市産業史料館を拠点とし、ガイドブックを配布して自由に工場等を見て回ってもらう、というイベントである。初年度は 54 の参加事業所で来場者 1 万人の規模だったものが、今や 109 事業所で来場 5 万 3000 人の規模となり、広大なエリアに多くの工場が点在する。燕三条の大きな強みとしては、スプーンなどの身近な「食」に関連する B to C の金属加工が多いことや、各工場で多様な製品を作っていることが挙げられる。

燕三条 工場の祭典実行委員会

工場の祭典、様々な楽しみ方

各工場のコンテンツを事務局側が手がけることはなく、製作工程を準備すること以外は自由であることから、ワークショップを開く会社や展示・販売をする会社など、その種類は様々である。一方、イケメン職人目当てや道具目当て、年配職人の手目当てなど、来場者側の趣味も多様で、積極的に撮影してもらうことで宣伝効果も生まれている。統一しているのはデザイン面で、ひと目でオープン工場だとわかるようにピンクストライプを採用しており、ダンボールやテープを用意し、各工場で思い思いの装飾が行われている。

燕三条 工場の祭典実行委員会

多方面に広がる祭典

「工場の祭典」当日に農家の人が独自に始めたイベントがきっかけとなり、３年目には製造業である「工場」のみならず、農家を巻き込んだ「耕場」と販売を促進する「購場」が新しいコンテンツに加わった。また、全国の産地を集めて産地間の交流を深める「産地の祭典」や、台湾・イギリスでの展示会を経てモノづくりの輪が広がっている。一方で現在は大部分を補助金や協賛金に頼っており、予算がなくても持続性を保つために「株式会社つくる」が今年設立された。後継者育成や、まちづくりを担う予定について報告された。

ラウンドテーブルミーティング

ラウンドテーブルミーティングでは、コメンテーターとして、大阪の工業地域である東大阪市高井田の住工共生まちづくりに詳しい (有) ハートビートプラン代表の泉英明氏と、東日本大震災の被災地（岩手県大槌町・福島県南相馬市小高地区）における地域復興に関わる東京大学特任教授（復興デザイン研究体）である窪田亜矢氏をお迎えし、モノづくりに関するまちづくりについて、熱い議論が交わされた。

東大阪における住工共生のまちづくり

コメンテーターの泉英明氏からは、東大阪市（大阪府）における自身の住工共生のまちづくりへの取り組みについての紹介があった。住工共生のまちづくりで考えてきたことは、工場の操業環境を守ることであり、そのためにマッチング事業や機器の共同購入などを進めてきたという。一方、ゲストパネリストの方々から紹介のあったまちづくり活動は、不動産事業やクリエイターネットワークなど、工業以外からのアプローチが多く、モノづくりの課題をモノづくり以外で解決する切り口は、泉氏が活動をはじめた約 10 年前にはない視点であったとのことである。

東大阪市の住工共生について語る泉氏

モノづくりのまちづくりを取り巻く状況の変化

公共空間の利活用や官民連携のまちづくりに積極的に取り組む泉氏からみると、ゲストパネリストらの活動は自身の活動に非常に近いという。自分ごとでどれだけ楽しめるかに主眼を置いた活動は、水都大阪でのキャッチフレーズ「やってみたいことをかなえよう」にも反映されている。一方、10 年前の東大阪では住と工の対立が目立ち、工場が面白いことをやってみようという今の風潮はあまりなかった。現在では東大阪においてもオープンファクトリー的な活動がなされるなど状況が変化しつつあるが、以前の住と工の対立が落ち着いたことが転換点であったようだ。

浦安のまちづくりとクリエイティブ・ファブタウン

コメンテーターの窪田亜矢氏からは、自身が活動する浦安市（千葉県）でのまちづくりについて紹介があった。浦安市の約 3 分の 1 は埋め立てでない漁師町であり、漁業という生業を支えてきたまちならではの空間が存在する。現在では漁業そのものは衰退してしまったものの、今でも残る空間構造を伝承する取り組みを進めている。パネリストの方々のフィールドも同様で、生業の履歴による空間をうまく活用して活動されていることが印象的であったという。

原発被災地域におけるネットワーク

窪田氏はまた、原発被災地域である南相馬市（福島県）で小高復興デザインセンターの運営に携わっている。イノシシによる獣害に悩まされた被災地にて、イノシシが唐辛子を嫌がる習性を利用し、各家に唐辛子の種を配布し、実を買い取る活動が行われている。さらに、買い取られた唐辛子はラー油などの 2 次製品として販売され、地域に伝わる住みこなすための技術を深化させている。住民の発意と地域の励まし合いによってネットワークを形成され、実現したプロジェクトの一例といえる。

被災地での復興まちづくりについて語る窪田氏

町工場と創造活動の距離感

モノづくりのまちづくりを実施する際に、工場のネットワークとまちづくりや創造活動のネットワークの距離感についても議論が行われた。取り組みによって、アプローチが多様に異なり、あくまでまちづくりのリソースの一つとして町工場を位置づけている場合やプロジェクトベースでのミッションに従って、それぞれ独自のネットワークが構築されていたが、特に、連氏からは、「ラウンドテーブル」の実施により、お互いの肌感覚がつかめるようになった点、燕市・三条市のような創造性を交えた工場の存在や、精密系・デジタル系工場などがどんどん新しくなっており、アップデートされていることへの期待などが指摘された。一方で、町工場の職人とクリエイターの間を技術的な（モノづくりの専門としての）通訳者の不足についても課題として挙げられた。

クリエイターのつながりとサポート

クリエイター同士のつながりについては、ショップボットが使えるとか、工房やオフィスを設けたいときに町工場情報が手に入るなど、実利的なつながりがあると同時に、モノづくりは一人で行うことにはハードルがあるので、みんなでやることでそれが突破できること、そして、それが群としてみえてくることでメリットが生じうることなどが議論された。特に、事業化の難しい、クリエイターやモノづくり関係者たちを「つなぐ」という応援を民間自ら行っている点のすばらしさなどが指摘された。サポート自体の事業化については、今村氏によれば、当初はお金がないため、シェアスペースのみを運営して、そこでコミュニティ自体で課題解決してもらっていたが、東京都からの事業採択を基盤として、ソフトの事業化が可能になったとのことであった。連氏からは、不動産事業として捉えることで、サポートから利益をえるよりも、資産価値を上げて、まちの価値がどう創出できるかという面から事業回収を考えることの重要性が述べられた。

起業家の活動支援について語る今村氏

「死の谷」を巡って

今村氏から提起のあった、企業の成長における「死の谷」についても議論があった。今村氏によれば、「お金」「モチベーション」「チャンス」という三つの死の谷があり、創業時の借金や融資の難しさ、創業からビジネスモデル構築に至る過渡期における、困難に直面したときに維持できるモチベーションの維持、発信や情報を得るチャンスのなさなどが課題となるが、仲間やシェアコミュニティを通じて、元気をもらったり、広報や展示会のチャンスを得たりすることへの期待が述べられた。

活動の事業化について

今村氏の活動では、東京都からの助成が出るまでは、創業者に対してスペースを運営してコミュニティを作ることで利用者間での助け合いを促してきたが、助成によりスクール開催等のノウハウができてきたため、今後はソフト面の支援も継続していく予定だという。連氏からは不動産事業としての側面から、単純にテナントをサポートするだけではなく、テナントの人たちを含め運営する不動産自体にいかに付加価値をつけるかが事業として継続する上で重要だという意見が挙げられた。

伝統産地のモノづくり

また、伝統工芸というモノづくりスタイルについては、野嶋氏から「塗師」の多工程プロデュース型と彫刻のような個人による直接対面型、両面のよさについて述べられた。専門技術のワザの魅力と個人発意の創造性が組み合わさることへの期待、そして、生産の裏にある生活（暮らし）のネットワークの可能性についても議論が行われた。

伝統工芸の製作スタイルについて述べる野嶋氏

「燕三条 工場の祭典」と「おおたオープンファクトリー」との違い

山田氏が実行委員長を務める「燕三条 工場の祭典」では、参加工場数は増加しているものの、次年度の参加を辞退する工場も少なくないが、参加工場が常に変

化し、都度面白がれる人でイベントを運営していることが好循環につながっているという。おおたオープンファクトリーとの違いについては、まちの成り立ちや得意技が異なることから気にしていないと山田氏は言う。一方、大田区では、BtoB 製品をメインで製造する工場が多く、オープンファクトリーのメリットの理解が難しいという違いが議論に挙がった。燕・三条においては、15 軒ほどの工場が常設型のオープンファクトリーを設置していることから、経済性を含めたオープンファクトリーの価値を認識できているという。

大規模イベントにおける新たな課題

「燕三条 工場の祭典」における「去る者は追わず、来る者は拒まず」のオープンな参加工場の募集方法について議論が行われた。山田氏によれば、イベントの方針は中心メンバーの価値観で決められるため、エリア内にはイベントに反対する工場もあるという。また、基本的には来る者を拒まない方針であったが、参加工場の増加に伴うセレクションの実施や、混雑への対応として来訪者への課金制度などを検討するなど、新たな課題に直面していることが述べられた。

燕・三条での活動について語る山田氏

職人への負担に対する想い

工場オープンのイベントをする際の工場や職人への負担に対する想いについて議論がなされた。「燕三条工場の祭典」の運営では、もちろん職人への負担は存在している中で、複数日あるイベント開催期間内に企業の中で休みを設けてもらったり、交代で出てもらったり、企業の個別の対策をしてもらっているという。一方、浅草 A-ROUND では、運営側の負担が大きくなってしまっているという問題があり、今後組合組織を作ることで対策していく方針について述べられた。こういったイベントを続けていくには、一部の人が全てをやるのではなく、参加者それぞれが「小さなオーナーシップ」を持って分担しながら企画運営を行なっていくことが重要であるとの意見と同時に、「こんなことやって何になるのか」と考える職人が多い環境の中、やる人が率先して全体を引っ張っていくことも、特に初動期では重要であるという意見も挙げられた。

オープンファクトリーがまちや暮らしに与えた影響

地方である燕市・三条市では、イベントを続けているうちに、シャッター商店街や郊外の空き団地にシェアハウスや宿泊施設ができたり、定住してその土地で仕事を見つけたりする事例が次々と現れはじめ、観光面や外部からの移住者の増加といった面で確実に変わってきているという。一方で、シェアハウスに抵抗感がある市民の方やオープンファクトリーに否定的な方もいることは事実で、地域に存在する薄皮を１枚１枚剥がしていくような作業が必要になってくることが述べられた。

また、浅草北部では、外観は普通の一軒家だが開けると職人さんが畳の前でモノづくりをやっているような町工場がマンションのすぐ隣にある、という光景が多い。今村氏は、そういった地域で、職人にとって当たり前となっているモノづくりをもっと可視化し、讃えるような動きができる余地があると考えているという。例えば廃材の革を再利用した暖簾を使ったアートプロジェクトなどの形で、今までと違った視点からモノづくりの価値を魅せる動きが本当はあればいいのではないかという提案が示された。

モノづくり系の活動とまちの中の暮らしとの関係については会場から質問が挙げられた

ラウンドテーブルミーティングのまとめ

今回の議論を振り返り、モノづくりに対して様々な人がそれぞれの熱い想いを持っており、それは地域の産業を何とかするために関わる人や、面白いから関わる人、地域のリソースとしてビジネスライクに関わる人など、様々な関わり方があること、そして、そのような関わりの中で、工場や職人の方々とは、「いいものはこうだ、目指すべきものはこうだ」という考えを持って接してゆくことが重要であることが語られた。一方で、モノづくりへの意識や理解の度合いが様々である多くの一般市民の方を、どの部分までクリエイティブタウンに関わらせていくかを考えることは難しく、そういった方々に取り組みを訴求するにはどうすべきかが課題であることが挙げられた。また、都や国の政策として統合的に「クリエイティブ・ファブタウン」を実現するために、政策的にどのようなことができるかという議論は、今回の議論では挙がって来ず、これからの課題として提起された。

各地でのモノづくりのまちづくりについて活発な議論が交わされた

議論を交わすパネリストとコメンテーターの方々

おおたの活動の今後

最後に、今後のおおたでの取り組みの展望が語られた。2018 年度で第８回を迎えるおおたオープンファクトリーは、様々な人を集めるプラットフォームや、そこから巣立っていくインキュベーターとしての機能を果たしてきたが、今後、その先を見据えて、工業系・企業系・クリエイティブ系・行政系などの様々な立場の人との情報共有のための「未来戦略会議」を開催し、各所のコラボによりどんなことが起きるのかを探っていくという。これからは、モノづくりを資源として生かし、大田を日本、世界に開いていく「おおたオープン！」を中心に、その中のモノづくり部門としておおたオープンファクトリーを位置づけながら、おおたクリエイティブタウンを目指してゆく将来像について言及があった。その中で大事な方向性として、今までインキュベーターとして実験的に行ってきたおおたの活動をどう事業化・プロ化していくか考えていくべきであり、これまでの限られた範囲に留まらず、「オール大田化」への展開に向けて取り組んでいることが報告され、会は締めくくられた。

パネリストらのテーマについて議論する岡村氏と泉氏

おおたの今後の展望について語る岡村氏

大田クリエイティブタウン研究会（横浜国立大学、首都大東京、一般社団法人おおたクリエイティブタウンセンター、一般社団法人大田観光協会）
「大田モノ・まち BOOK 2018」
編集プロジェクトメンバーリスト

【横浜国立大学】
＜都市計画研究室／地域課題実習「おおたクリエイティブタウン研究プロジェクト」＞
野原　　卓　横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院 准教授
　　一般社団法人おおたクリエイティブタウンセンター センター長
神谷　圭祐　横浜国立大学大学院都市イノベーション学府 博士課程前期 ２年
細野　真央　横浜国立大学大学院都市イノベーション学府 博士課程前期 ２年
渡辺　　翼　横浜国立大学大学院都市イノベーション学府 博士課程前期 ２年
種崎　夏帆　横浜国立大学大学院都市イノベーション学府 博士課程前期 １年
菊池　　諒　横浜国立大学大学院都市イノベーション学府 博士課程前期 １年
松永　理紗　横浜国立大学理工学部建築都市・環境系学科 ４年
小川　岳志　横浜国立大学理工学部建築都市・環境系学科 ４年
宗野みなみ　横浜国立大学理工学部建築都市・環境系学科 ４年
山岸　　匠　横浜国立大学理工学部建築都市・環境系学科 ４年
工藤　総太　横浜国立大学経営学部経営学科　３年
張　　安　横浜国立大学都市科学部都市社会共生学科　２年

【首都大学東京】
＜観光科学域地域計画・マネジメント領域＞
川原　　晋　首都大学東京大学院都市環境科学研究科観光科学域 教授
　　一般社団法人おおたクリエイティブタウンセンター 理事
岡村　　祐　首都大学東京大学院都市環境科学研究科観光科学域 准教授
　　一般社団法人おおたクリエイティブタウンセンター 副センター長
関谷　　悠　首都大学東京大学院都市環境科学研究科観光科学域 博士課程前期 １年
前　奈津実　首都大学東京大学院都市環境科学研究科観光科学域 博士課程前期 １年
天目　岳志　首都大学東京都市環境学部自然・文化ツーリズムコース　４年
小向　　光　首都大学東京都市環境学部自然・文化ツーリズムコース　４年

【一般社団法人大田観光協会】
＜担当＞
杉村　克之　一般社団法人大田観光協会 事務局長
小林　　平　一般社団法人大田観光協会

【一般社団法人おおたクリエイティブタウンセンター】
栗原　洋三　一般社団法人おおたクリエイティブタウンセンター 副センター長
　　一般社団法人大田観光協会 理事
山本　章子　一般社団法人おおたクリエイティブタウンセンター 理事
佐山　行宏　一般社団法人おおたクリエイティブタウンセンター 理事
田中　　隆　一般社団法人おおたクリエイティブタウンセンター 理事

おおたモノまち BOOK 2018

編著：大田クリエイティブタウン研究会・一般社団法人おおたクリエイティブタウンセンター
【編著担当：横浜国立大学（野原卓、細野真央、渡辺翼、菊池諒、神谷圭祐、種崎夏帆、松永理紗、宗野みなみ、小川岳志、山岸匠）、首都大学東京（岡村祐）】

発行：大田クリエイティブタウン研究会
事務局：一般社団法人 おおたクリエイティブタウンセンター
〒 146-0093 東京都大田区 矢口 1 丁目 21-6 くりらぼ多摩川
e-mail:info@oct-c.com

2019 年 3 月 15 日

許可なく複製・複写することを禁じます。
引用を行う際は、必ず出典を明記願います。

※本報告書は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）「地域の産業特性を活かしたエリアコンバージョン手法の構築と展開可能性に関する研究」
（課題番号：15K06350、代表：野原卓）の助成を受けて作成した。